

吾妻鏡1、2

国文学資料館の古典選集本文データベースで『吾妻鏡』の語句検索が出来る。

- 1 文治二（1186年）三月十日の項に「又關東御知行國國內。乃貢未濟庄庄」として列挙される内に

顯光寺（天台山末寺）

とある。なお、善光寺（三井寺領）の名もある。

註 国立国会図書館デジタルコレクションで「吾妻鏡」を検索、「日本古典全集刊行会」正宗敦夫編「吾妻鏡 第2」の15コマ目。DOI 10.11501/1110969

- 2 治承四年九月七日の項の「栗田寺別當大法師範覺」は、『戸隠山顯光寺流記并序』に二十五代別當とある「寛覚」

の誤字とする説がある。

○七日。丙辰。源氏木曾冠者義仲主者。帶刀先生義賢タテハキセンジャウ二男也。

去

義賢者。久壽二年八月。於武藏國大倉館。爲鎌倉惡源太義平主。被討亡。于時義仲。爲三歳嬰兒也。乳母夫中三權守兼遠懷之遁「下」于信濃國。「木曾」令養育之。成人之今。武略稟性。征平氏。可興家之由有存念。而前武衛於石橋。已被始合戰之由達遠聞。忽相加欲顯素意。爰平家方人カタフト。有笠原平五頼直者。今日相真軍士。擬襲木曾。木曾方人。村山七郎義直。并栗田寺別當大法師範覺等。聞此事。相逢于當國市原。決勝負。兩方合戰半。日已暮。然義直。箭窮頗雌伏。遣飛脚於木曾之陣。告事由。仍木曾率「来」大軍。競到之處。頼直怖其威勢。逃亡。爲「加」城四郎長茂。赴越後國云

註 国立国会図書館デジタルコレクションで「吾妻鏡」

を検索、「日本古典全集刊行会」正宗敦夫編「吾妻

鏡 第1」の27コマ目。DOI 10.11501/1111511